

むすびに

—「中東」地域概念をめぐる—

最後にむすびにかえて、以上に述べた「総論」を補う意味で、「中東」地域の範囲の問題、および研究上の地域バランスの問題について、簡単に付言しておきたい。

実は、中東の地域的範囲について、必ずしも中東地域研究者の間に厳密な合意ができていないわけではない。その場合たとえば、中東の東端をアフガニスタンにするか、あるいは西端にモーリタニアを加えるか、または北アフリカ（マグレブ）と中東とは区別すべきか、といった議論は、一見すると技術的に処理が可能な問題とみられかねない。しかし、地域の設定それ自体は、まさに地域研究の方法と密接に結びついた根本的な問題であることを、もう一度確認しておく必要があるだろう。

ここで、中東概念の歴史的成り立ちについて、教科書的な説明を行うことはできない。しかし、地域研究のあるアプローチからすれば、中東概念に次のような特徴づけを与えることも可能である。すなわち、中東の「前期的」概念であった「近東」が、主として19世紀における世界資本主義とこの地域とのかかわりを示す地域概念であったとするならば、これに対し中東は20世紀、とりわけその後半以降の世界システムとのかかわりを表す地域概念である、という考え方である。

その場合、本書の表現によれば、重層的な政治的支配に対する民族運動の主体の形成、ヨーロッパ近代の矛盾のしわよせとしてのパレスチナ問題、世界資本主義の発展にとって不可欠の自然的基礎となった中東石油の存在、そしてイラン革命（さらには湾岸戦争）が代表する「反システム運動」の新たな展開、といった数々のイシューが、世界システムにおいて中東という地域が

もつ意味を、さらにはその地理的範囲を決定する、ということになる。

こうしたいわば世界システム論的な地域研究のアプローチからすれば、当該地域に関する研究の地域的偏りの問題に対しても、ある程度の回答が可能である。たとえば、本書の第II部に収めた11の論文のうち、5本がエジプトに関する研究であるが、これはアジア経済研究所の中東研究における偶然的な地域的偏りだけを反映したものではない。もちろん、エジプトは、世界的にみれば中岡が [133] の「はじめに」であえて述べたように確かに「小国」ではあるが、中東域内、とりわけアラブ世界ではその人口のほぼ3割を占める大国である。しかし、エジプトが、とくにそれが政治研究の素材としてこれまで多くの研究者を引きつけたのは、まさに戦後世界における「中東問題」の形成において果たしたこの国の中心的な位置を反映したものである。

しかし、中東政治研究においてエジプト、およびイスラエルを含めた東アラブが占めたその中心的な位置は、その後大きく変わった。ある政治学者は、1960年代を「ナセルの時代」、70年代以降を「サウジの時代」（あるいは「石油の時代」と呼んだが、この変化はそうした域内の「中心」の移動というより、むしろ中東地域が新しい有機的関係をもつ分極化の時代を迎えたものとしてとらえるべきであろう（たとえば、従来は「周辺」に位置づけられがちであったマグリブも、そこにおける政治思想や社会運動の新展開に対し、現在、大きな関心が寄せられている）。

こうした中東概念のシステムの構成において、新たに重要な意味をもつようになったのが、イラン革命、イラン・イラク戦争、そして湾岸戦争と、連続して世界システムに大きな衝撃を与えた「湾岸」地域であったことはいままでもない。中東研究における「周辺」地域であり相対的に蓄積の少なかったこの「湾岸」地域に関し、基礎的な研究を行う体制の整備が今あらためて要請されているといえよう。

しかし、以上にみた世界システム論的な接近法には、従属理論に対してと同様、その認識枠組みにおいて、たとえば「発展」あるいは「民主化」の担い手、主体を見落とす危険性がある、という批判をまぬがれることができない

いかかもしれない。一方、この世界システム論的地域研究に対置されるアプローチとして、異文化研究を中心にして「地域」の設定を考える方向、「総論」の文中に出てきた表現によれば、オントロジックな文化価値を内側から理解する接近法を設定することもできる。実は、この二つの方法論の対置は、繰り返し述べてきたところの、ギブのテーゼとこれに対する批判という図式の別の表現にほかならない。

おそらく問題は、このシステム論的接近法か異文化のオントロジックな価値への直接的な接近か、という二者択一ではなく、なんらかの内的関連をもった両者の結びつきを模索し、それを具体的な研究成果として生み出してゆくことにあるのではなかろうか。いささか舌足らずな表現ではあるが、それが、われわれ地域研究者に課せられたひとつの課題であるところでは述べておくことにしたい。